

地平には厚い雲がたちこめ、山々の姿を隠している。

もうひとりの、背の高い黒髪の青年も空をあおいだ。

「そうだな、風も強え。少し急ぐか。嵐のなか、野宿なんとするもんじゃねえからな」

シエルツの肩から、ひょいと荷物を取りあげる。

「待て、……ザック！」

シエルツは取りあげられた荷物に手を伸ばしたが、ザックはひらひらと手をふる。

「町の近くで返すよ。男のふりすんのは、人前だけでいいだろ、アリア？」

シエルツは何か言いたげに口を開きかけたが、あきらめたのか黙って歩きだす。そのようすに、ザックは笑みをもらした。

ほどなく通りついたのは、教会といくつかの民家、一軒の商家があるだけの小さな集落だった。商家の軒先には鋤や鍬がならべてあるので、周辺には農家も多いのだろう。ザックはあたりを見回す。

「さて、こんなシケた村で、通りすがりの傭兵風情に宿を貸してくれるようなお人好しはいるかねえ」

家々の中からのぞき見ている気配はする。我が家の扉を叩きにきませんように、と願っているのだろう。

「ひとまず、店でようすを聞いてみようぜ。最悪、教会の

物置きくらいは貸してくれるだろ」

「確実に近づいている暗い色の雲を見あげていたシエルツも、相棒について商家へ向かった。

店のまえには、粗末な馬車が一台停まっている。むきだし荷台にはなにも積まれておらず、御者台には疲れた表情の女が座っていた。女は風来者に気づき、きつい視線を向ける。

ふたりは、女を無視して店に入った。奥からは、懇願する男の声が聞こえていた。

ザックはニヤリとしてシエルツに耳打ちする。

「……今夜は無事、宿と温かい食事がありつけそうだ。外の目つきの悪い奥様が、料理上手ならいいけど」

店の奥には、迷惑そうな顔を追い払おうとしている店主と、取りすぎるように頭を下げる男がいた。

「小麦一袋……いや、半分でもいい。頼むから、ツケでゆずってくれ！ 収穫が近いのは知ってるだろう」

「おまえさん、ツケがどれだけ溜まってると思ってる？ 現金じゃなきゃもうゆずれないよ。こっちも商売なんだ」

店主の顔に浮かぶうんざりは、あからさまで色濃い。そして男の額には、脂汗が浮かんでいた。

「ちょっと失礼するよ」

ザックは男の肩を叩く。

「収穫が近いってことは、納屋は空だろ。嵐がすぎるまで